

『なぜ歴史を学ぶのか』

リン・ハント著、長谷川貴彦訳

岩波書店／2019年10月／1600円（税別）

女性が歴史学の研究者からごく最近まで外されていたことは、改めてショックに思う。リン・ハント自身が女性の歴史学者として先駆者であり、自身を一事例として取り上げていて、それを示している。歴史学における事実と解釈について、記述が簡潔かつ要を得ている点も、本書の魅力のひとつだ。カー『歴史とは何か』の21世紀版だと言われるのも首肯できる。ハントは歴史学をシティズンシップのための学校と言い切る。また、アカデミズムの歴史学が難解となる一方で、通俗的な歴史がその領域を拡大していき、その二つの間が消滅しつつあるという。歴史学と歴史教育と考えるうえで示唆的だ。

『未来への大分岐』

マルクス・ガブリエルら 斎藤幸平編

集英社新書／2019年8月／980円（税別）

サブタイトルは「資本主義の終わりか、人間の終焉か?」。「ここでどのような選択をするかによって、人類の未来は決定的な違いを迎える」という意味で、現代は「大分岐の時代」だと言う。

確かに、気候変動など「待ったなし」なのに、一方で「自国ファースト」の政治家が支持を集めてしまう。AI、クローン技術など、野放しにしていっただら、と考えると怖い。では、どうするか。

二人の哲学者と一人の経済ジャーナリストが、斎藤氏と対談して語る内容に共感した。一言で言えば、「民主主義」であり「ヒューマニズム」を貫く、ということだと思った。だが、その実行は困難を伴う。それをどう乗り越えるか。一人一人の足元からの実践的な模索と、そこからどんな政治勢力が生まれ成長していくか、未来はそこにかかっているのでは？

『若者は社会を変えられるか?』

中西新太郎

かもがわ出版／2019年8月／1600円（税別）

若者を政治から遠ざけようとする「しかけ」が世に満ちているなか、新たな胎動も始まっている。それに対するバッシング、とせめぎ合っている現状を豊富な引用例で描いている。

SEALDsの若者たちが叫んだ「勝手に決めるな」という言葉を「民主主義感覚」ととらえる筆者の視点に賛同する。大人を含めて、「自他を尊重する」とはどういうことか、を追求していきたい。

『日韓共同の歴史教育』

三橋広夫編集代表、日韓教育実践研究会ほか編集

明石書店／2019年11月／2700円（税別）

日本と韓国の教師それぞれが授業実践記録を記すというのは類書が無いだろう。合わせて24の授業が本書に載る。韓流ブーム以前から25年以上に渡って交流してきた分厚い実績があって本書は実現した。子どもの歴史認識をどう育むかという共通の目的のもとで、日韓の教師が交流を積み重ねた。問いに対する子どもの意見が多く記されており、日韓の子どもの歴史認識がよく見えてくるのも本書の大きな特徴である。それが自分で授業を構想する上でも参考になる。

『平成時代』

吉見俊哉

岩波新書／2019年5月／900円（税別）

書名の通り、昨春に幕を閉じた平成の30年間に及ぶ通史である。但し、本書の帯には「『失敗』と『ショック』の30年史」とあり、「テレビの甘ったるい平成回顧番組」とは根本的に異なっているので、読み進めるには相応の覚悟が必要である。

著者は平成の30年間を「壮大な失敗」「失われた30年」と総括するにとどまらず、「今後も続く『失われる半世紀』への序曲」と位置付ける。令和と改元されても、「グローバル化とネット社会、超少子高齢化」という潮流は続くのであるから、政治・経済・社会のあらゆる面での失敗をシビアに直視して学ぶことからしか、将来への希望や展望は開けないという。同時代史を共有してきた評者は、正直に言うに通読して暗澹たる気持ちへと陥ってしまったが、著者曰く「失敗は成功のもと」と。

『ルポ教育困難校』

朝日奈なを

朝日新書／2019年7月／790円（税別）

入試における偏差値の序列から、俗に「底辺校」というレッテルを貼られる高校を、著書は「教育困難校」と呼ぶ。教員として教育困難校に勤務した経験を持つ筆者が、その在校生・教員・保護者などの実像を描き出し、教育活動を展開することが文字通り困難な現状を重層的に報告している。

在校生全員が大学進学を目指し、進学実績を競い合う進学校の存在の一方、これも日本の教育現場の現実である。